

教育・保育目標	あふれる笑顔、つながる心、たくましく育つわかば
重点目標	人とのつながりを大切にし、心も体もたくましさを備えた笑顔のあふれる子どもを育成する

項目		重点項目	具体的施策	達成目標	自己評価	成果と課題	改善策	学校関係者評価
学力の向上	学びを大切にした保育の実践	主体性をはぐくむ遊び環境	・毎月の職員研修において、園庭環境についての見直しを全職員で行い、共通認識するとともに、子ども理解を深める。 ・学年や棟で連携しながら、子どもが自ら遊びだし、遊び込むことができる環境作りを行う。 ・月１回以上の乳児・幼児会議、および年四回の乳幼児リーダー会議において、主体性を育む保育内容について話し合う。 ・自園の実態に応じた教育課程の編成ができるように、期ごとに１回教育課程の見直しを行う。	・保護者アンケートにおいて、「子どもは楽しく園生活を送っている。」「こども園は、子どもの発達や興味関心に応じた保育を行い、子どもの意欲や主体性が育まれるように努めている。」と回答した割合がそれぞれ８０％以上になる。 ・子どもの育ちや学びを読み取り、主体性を大切にした保育展開が計画的に行える。 ・自園の実態に応じた教育課程を、各学年及び全職員で編成や見直しをした上での教育保育を行える。	A	・保護者アンケートにおいて「子どもは楽しく園生活を送っている。」「こども園は、子どもの発達や興味関心に応じた保育を行い、子どもの意欲や主体性が育まれるように努めている。」と回答した割合がそれぞれ９０％以上であり、肯定的である。 ・月１回以上の会議に基づいて子どもの育ちを読み取り、子ども理解を共有した上で環境の再構成を行い、主体性を育む環境を整えることができた。 ・教育課程の見直しを各学年で１～２回程度、各学年の代表で１回程度行い、自園の実態に応じた教育課程の編成を行うことができた。	・引き続き子どもの発達や興味関心に応じた保育を行い、子どもの意欲や主体性が育まれるように努める。 ・自園の実態をこまめに教育課程に反映させていくことで主体性を育む保育展開が行えるよう、年度初めに教育課程について話し合う日を設定しておき、定期的に確実に見直しを行う。	・主体性になじめない保護者への理解を得ることを今後も行っていく必要があると感じました。 ・主体性を育みながら一度体験させる事は難しいのだろうかと感じる。やってみないと分からない事の方が多いと思う。 ・子ども達と一緒に木工の時間を過ごしているが、毎回興味を示して参加している。くぎを打てるようになり、木材を切りきった時の笑顔がまぶしく感じます。先生方の子どもに対する愛情が感じられます。
		自然環境の活用	・園庭に植物や生き物が育ちやすくなるよう、植物の種まきや移植、追肥、虫の生息する環境づくりなど、年間を通して具体的に計画し、実施する。 ・ビオトープの生き物に興味関心が持てるよう様子を確認したり、手入れをしたりする。 ・野菜や植物の生長過程に関心をもてるような表示を作成し、生長過程を見られるようにする。 ・職員間で自然環境の活用について話し合う機会をつくる。	・子どもが自ら、葉や花、枝や枯葉等の植物を使って遊びに取り入れたり、生き物を見つけて関わったりする等、自然とふれあう姿が見られる。 ・保護者アンケートにおいて、「こども園は、子どもの豊かな感性を育むための自然環境を工夫して整えている。」と回答した割合が９０％以上になる。 ・季節に応じた野菜の種まきや苗植え、収穫が計画的に行える。 ・月に１回以上職員で自然環境の活用について話し合い、環境の再構成を行う。	B	・落ち葉を園庭に撒いたり、ビオトープにドジョウやメダカを放流したり等、自然環境を整えたことで、園庭にある自然物を子ども自らが探し、花などの遊びに取り入れる姿が多くみられた。 ・保護者アンケートにおいて 90％以上の肯定的な回答を得ることができた。 ・栽培する野菜や花等の決定の時期が遅く、購入に時間を要することがあった。 ・保育室で生き物の飼育は積極的に行っていたが、植物の栽培は園庭で行うことが多く、乳児や３歳児は気持ちが向きにくかった。 ・保育者だけで栽培物の決定や、栽培に関する準備、世話等進めていることがあった。 ・保育者自身の栽培に関する知識の乏しさがあった。	・栽培を意図的に進めるにあたり、畑以外での野菜や植物等の年間計画を作成する必要がある。また、年間計画に基づく栽培物に関して、図鑑や保育室の掲示などを通して子どもが興味関心をもてる保育を考える。 ・栽培している花等を遊びに取り入れるとすぐに不足するため、十分な花の確保のために職員、保護者や地域の方に呼びかける等、用意できる策を考える。また園庭だけでなく室内でも植物を栽培する機会を設けることを検討する。 ・ビオトープ等に生き物が住み着くことができるよう、どのような環境がよいかを話し合うことや子どもと一緒に水の手入れなどを定期的に行う。	・地域の方々の中には畑をされている方もいるので、ご指南頂けるとより良いと思います。生物だけでなく、雨の中遊ぶ等、自然も活用してはいかがでしょうか。 ・先生方が努力して下さっているのを感じる。せっかくのビオトープに生き物が定着すればと感じるが、小学校の様な技能員さん等、常に管理してもらえなければ難しいと感じる ・自然が相手の教育環境を維持するのは大変な事と推測します。得にビオトープは登園の目玉であり、更なる取り組みに期待しています。この分野は保護者や地域が手を出しやすい分野だと思います。園単独で背負うのではなく、既に行われていますが、周りを巻き込むのも一考かと思います。
豊かな心・健やかな体	自分も人も大切に育てる子どもの育成	互いのよさを認め合う保育	・自尊感情が高まるよう、個々のよさを大切にし、子どもの気持ちや考え、行動等を尊重した保育を実践する。 ・誕生会や誕生日を通して命の大切さを感じたり、自分は大切にされていると感じられたりするよう、一人一人に愛情深くかかわる。 ・異年齢、同年齢等、様々な交流ができる場を設け、互いに思いやりや親しみがもてるようにしていく。 ・年間を通して自然物や栽培物・花等の採集や飼育観察を通して命の大切さを感じられるようにする。 ・保育者自身の道徳性を常に振り返り、人権意識を高める。 ・人権に関する園内研修、保護者研修をそれぞれ年１回以上行う。	・保護者アンケートにおいて、①「保育者は、子どもに愛情深くかかわっている。」②「こども園は、子どもに自分を大切にすることや、他の人への思いやりが育まれるよう教育・保育に取り組んでいる。」と回答した割合がそれぞれ８５％以上になる。 ・異年齢、同年齢等、様々な関わり合いの中で、互いに思いやりや親しみをもって遊んでいる。 ・季節や発達に応じた育ちの中で、栽培している野菜や花の生長や花の美しさを感じたり虫や飼育している生き物に愛情をもって関わったりする姿が見られる。 ・個々の子どもの育ちについて職員間で情報共有を行い、保育計画の見直しとよりよい実践が行えるよう、クラスや学年での会議を月１回以上行い、人権尊重の視点での子どもの育ちや、保育について話し合う。 ・人権に関するＤＶＤを視聴し、その内容を協議し研修を深める。	A	・保護者アンケートにおいても９０％以上の高い評価をいただくことができた。 ・意図的に異年齢の交流をもち、関わり合う機会を設けたことで、互いに思いやりをもってかかわる姿が見られている。 ・０歳児から５歳児までが園庭で、同じ環境の中、好きな遊びを通してかわりあう時間も設けていることから、幼児は乳児に対して思いやりをもった言葉をかけたり困っていたら助けていたりしており、乳児も生き生きと遊ぶことができた。 ・季節に応じた自然物を、園庭や保育室でも身近に感じられるような環境として整えていることから、園児が、その季節の草花に親しみ、昆虫などの生き物に関心を持ち世話をするなどして以上思いを寄せる姿が見られた。 ・各学年や乳児・幼児クラスとして月１回以上定期的に話し合いを行い、人権尊重の視点で共通理解した保育を行うことができています。 ・人権に関する職員研修では DVD を用いて全職員で研修し、意見交換も行えた。また、保護者研修においても全保護者に書面にて研修できるように推進した。	・全学年で互いに思いやりの姿がもてるように、幼児と乳児の職員間での連携が不可欠であることから、今後も互いの子ども達の姿を話し合う場を設け、連携を図る。 ・年間を通して、自然物や花・虫等への畏敬の念、生命を大切にする気持ち等が養われるよう、環境を作り、関わる機会を十分に提供する。 ・人権研修においては、職員は引き続き全員で研修し、紙面だけではなく実際に意見交換する場を設ける。保護者研修においては、保護者が研修後に、研修で出た意見をフィードバックし、浸透させていく。	・身近な大人である保育者同士がお互いの人権を大切にする関わりを子どもは見えていますので研修は大切であると感じています。 ・異年齢と関わる事が出来る環境を生かし、思いやりの心を育てる様努めて下さっている。生き物、植物にも命がある事をしっかりと学べる環境であると感じる。 ・幼児と乳児が同じ環境の中で過ごす事のメリットが感じられます。乳児が幼児に対して安心感をもち、幼児が乳児に対する思いやりの心が育っていると思います。幼稚園では出来ない事、得られない事、こども園ならではの利点がもっと見えてくる事に期待しています。

		健康な心と体を育む	・食べることや食材に興味をもてるよう、給食のメニューや旬の食材を掲示したり、栽培活動をしたりする。 ・自らの健康や心身に関心をもち、生活習慣を意識できるよう視覚教材等の環境を作り、「ほけんの話」などの保健指導を年6回以上行う。 ・子どもが自ら体を動かして遊びたくなるよう、室内外の環境や教材・遊具を工夫しながら活用する。	・保護者アンケートにおいて、「子どもは、こども園の給食を楽しみにしている。」と回答した割合が80%以上になる。 ・保護者アンケートにおいて、「保育者は、子どもの基本的生活習慣が身に付くように、個々に応じて関わっている。」「子どもは、こども園での遊びを通して体を動かして遊ぶことが好きになったと感じる。」と回答した割合がそれぞれ85%以上になる。 ・保健、栽培、給食等、各担当職員間で連携を図り、健康や食育に関する教材作成や指導を行う。 ・発達段階に応じた体を動かす遊びを職員間で協議し、環境の再構成を行う。	A	・保護者アンケートにおいて、「子どもは、こども園の給食を楽しみにしている。」と肯定的に回答した割合が85%以上であった。 ・保護者アンケートにおいて、「基本的生活習慣」「体を動かして遊ぶ」項目がそれぞれ95%以上の肯定的な回答があり、一定の評価が得られた。 ・健康支援員からの「ほけんの話」を定期的に年6回以上行うとともに、掲示物も定期的に行った。 ・栽培活動や季節に合う食材の提供に取り組み、食材に興味をもって食し、食べることの楽しさや喜びを感じることに繋がった。 ・クラス会議、乳児・幼児会議、職員会議などで、発達段階に応じた体を動かす遊びを職員間で協議し室内外に工夫した環境を構成し、活用することができた。園庭には、手に取りやすく扱いやすい遊具を用意したことで、子ども達が主体的に遊ぶ姿が見られた。また、乳児と幼児が関わりながら一緒に遊ぶ姿もあった。	・収穫や収穫物の調理を計画的に実施できるよう、乳児・幼児間の職員で連絡調整を行い、各年齢に応じた食体験が実施する。 ・今後も年齢に応じて健康に関する話を適時実施し、子どもが自ら意識をもって生活習慣を身につけていくようにする。 ・今後も各学年のねらいに沿って、子どもが体を動かす遊びに充実感や満足感を味わえるように、年齢や発達段階、人数に応じて場の設定や時間の工夫を職員間で話し合い共通理解し取り組む。	・収穫物を食べさせることを保護者にも掲示で連絡頂く事で、家庭でも同一の会話が出来より良いと思いました。 ・季節の行事や旬の野菜等は家で口にするよりお友達と先生の話を聞きながら食べる方が記憶に残るようです。 ・園を訪れた時、元気に園庭を走り回る子ども達の姿を見ていると、こちらも嬉しくなってきます。残念ながら給食の内容や状況を詳しく知らない事から簡単に判断は出来ませんが、元気の素となる食事に関して、給食そのもののみならず、食に対する興味が養われているものと考えています。
開かれ信頼される学校園	安心・安全な園づくり	危機管理の徹底	・アレルギー児、与薬対応、避難訓練マニュアルと年間計画を作成し、全職員で共通理解し、変更時は迅速に共通認識を行う。 ・リスクマップの見直しを行う。また、月に2回、複数職員で安全点検を実施し、危険箇所発見時は全職員に周知し、速やかに改善する。 ・一斉メールを活用し、緊急時に子どもを保護者へ引渡す訓練を年1回行う。 ・保育の中で安全管理について職員で話し合い、発達段階に応じた指導を適時行う。	・全職員が共通理解できるよう、マニュアルを見直す。アレルギー児には毎日、職員間で成分表を確認し、個々の状態に即して提供できるようにする。 ・月1回、火災や地震等を想定した避難訓練を実施し、反省や課題を踏まえ、その都度マニュアルや計画を見直ししていく。 ・園の生活環境に潜むリスクについて共通認識し、破損や危険箇所の改善が迅速に対応できる。 ・保護者アンケートにおいて、「こども園は、災害等の発生に備えた避難訓練や施設・遊具等の安全点検を定期的に実施し、子どもの安全に関して適切な対応を図っている。」と回答した割合が85%以上になる。 ・発達段階に応じて安全な過ごし方や遊び方が身につくようになる。	B	・再度マニュアルの見直しを行い、全職員で共通理解した。欠席等により月はじめまでにアレルギーの成分表を受け取っていないことがあり、個別にサポートを行った。 ・竜巻の避難訓練を全園児が行えるように、時期を考慮し実施した。 ・月2回の安全点検で担当が修繕できるものは行った。大規模な修繕箇所は報告し全職員に共通理解した。 ・季節ごと起こりやすいリスクを挙げることで、職員の意識を高めた。 ・保護者アンケートで93%以上の肯定的な意見があり、子どもにとって安全な過ごし方が発達段階に依拠していると評価された。 ・避難訓練後の話をする際に「お・は・し・も」の約束を年齢や個々の発達段階に応じて絵表示等を使用して安全指導に取り組んだ。	・前月末までにアレルギー成分表の提出が完了するよう点検を行い、誤食のないように徹底する。 ・避難訓練や安全点検での反省、修繕箇所の報告などは引き続き会議や文言で職員に伝達し、共通理解を図る。 ・様々な災害の備えとして、定期的に物品や備品の点検を行う。	・時折不審者の話がでてきますが、案外該当者では無いかもしれません。普段から園外を歩く一般の方にも職員があいさつをする事で、地域全体での見守りと警戒に繋がると思っています。 ・毎月の避難訓練はしっかりと子ども達の意識アップに繋がっている。子ども達が訓練してくる事で、家庭でも話題にあがり、避難場所の確認等が出来ている。 ・危機管理の分野は多岐にわたる事を改めて認識しました。得にアレルギー成分に関しては、乳児・幼児個々の情報を共有するのは大変な事と思います。その様な中で、全職員に共通認識を持たせる仕組みと努力を評価したいと思います。不審者に対する対応についての記述が無く、どの様な仕組みでどの様な取り組みを行われているのか知りたいところです。
		園情報の発信	・月1回クラスだより、連絡帳、写真掲示等を用いて教育保育の可視化を図る。 ・月4回以上ホームページを更新したり、地域の回覧を活用したりして、日頃の様子や職員研修など園の情報を発信する。	・保護者アンケートにおいて、「こども園は、こども園の情報を園だよりやクラスだより、連絡帳、写真掲示、ホームページ等を通じてわかりやすく保護者に伝えている。」「わかばこども園ガイドで知らせている教育・保育目標は適切である。」と回答した割合がそれぞれ85%以上になる。 ・地域の回覧を通した情報発信を、年に3回以上行う。	B	・保護者アンケートにおいて、それぞれ88%以上の肯定的な回答を得られ、評価されている。 ・クラスだよりだけでなく、クラスルームを活用することで、適時保育を可視化することができた。 ・地域の回覧を通した情報発信は、それに替えて誰でも閲覧可能なホームページの更新を中心に行った。	・情報発信においては、保護者以外の閲覧も前提とした子どもの様子を適時伝えやすいホームページの更新頻度を高めるなど、より活用する。 ・保護者にとって、園での様子がよりわかりやすい情報となるよう、職員間で情報の発信方法について研修を行う機会を設ける。	・担任の先生がこまめに写真をClassroomにupして下さることで、保育状況がより判りやすく感じます。 ・なかなかHPを見てみようと思う事が難しいので、更新のお知らせをもらえると閲覧回数が増えると思う。 ・保護者向けの情報発信は評価されていると感じています。玄関に行事写真等を掲示する事でわざわざHPアクセスしなくても保護者に伝わっていると思います。ただ、地域の得に高齢者へはHPよりも回覧の方が伝わりやすいと思います。
	地域に根ざした園づくり 園運営の推進	子育ての支援事業	・保護者対象の保育参観を2ヶ月に1回以上、学級懇談会を学期に1回、個人懇談会を年2回実施する。 ・保護者を対象に育児相談を適時、実施する。 ・地域の子育て家庭を対象に施設見学、育児相談を適時実施する。	・保育参観、学級懇談会に7割以上の保護者が参加する。 ・保護者アンケートにおいて、「こども園は、『子どもが心身ともに健やかに成長してほしい』という保護者の願いに応えている。」と回答した割合が80%以上になる。 ・施設見学の参加人数が80名を超える。	B	・参観・懇談は年間に4回、その他個人懇談も行った。参観については8割以上、懇談については7割以上の参加があった。また、幼児クラスの運動会、乳児クラスのみんなであそぼう会も実施できた。令和3年度に比べてコロナ禍が落ち着き、保護者に参加してもらえる機会が増えたことで施策目標を達成することが出来た。 ・保護者アンケートで90%の評価があり、一定評価された。 ・施設見学については多くの参加希望があり、短時間で人数制限をしたうえで実施し、2部制にする等の工夫をしながら目標達成することができた。	・参観や懇談及び保護者の参加行事については社会の動向を見ながら、模索し、工夫しながら行っていく。 ・施設見学の参加希望が多いため、日程や回数を検討していく。	・参観が少なかった分、写真付きの園での様や動画配信等工夫されている。 ・施設見学の参加者が多いのは園が評価されているのか、世の中のニーズが大きいのか判断が難しい所です。前者であるか両方であるものと理解しています。保護者に向けた参観や懇談、育児相談等も評価出来ると考えています。

		にじいろ 保育 拠点園の 推進	・にじいろ広場を年齢別に開催し、小集団で体を動かす遊び等を通して一人一人の発達への支援を図る。 ・にじいろ保育の拠点園として、インクルーシブ教育・保育について、ブロック内の各園所へ情報発信を行う。 ・インクルーシブ教育について職員研修を行い、専門性を磨き、また保護者研修会を通して、推進と情報発信をする。	・ブロック内の各園所ににじいろ広場についての案内をし、年2回他園所が参加できる日を設定する。 ・拠点園として大型遊具などの貸し出しリストやにじいろ広場についてＨＰに掲載し、ブロック内の園に大型遊具、教材、本の貸し出しをする。 ・年に1回以上職員研修、保護者研修を計画し、実施する。	A	・就学前施設へにじいろ広場体験の参加を呼び掛け、公立幼稚園、公立保育所の4施設から参加があったが、民間保育所からの参加は得られなかった。民間施設からの見学は11件あり、拠点園活動への関心は感じられた。 ・大型遊具などの貸し出しリストを作成し、掲載できた。 ・にじいろ広場について、年間13回ＨＰに掲載できた。 ・今年度、職員研修会を1回、保護者研修会を2回実施することができた。	・市教委や他の拠点園と情報共有や連携を行いながら、今後も継続して、にじいろ広場の参加を広く呼び掛けていく。 ・書籍や大型遊具等の貸し出しを今後も広く周知し、各施設で活用してもらえるようにする。 ・全職員が職員研修に参加する機会が作りにくかったので、多くの職員が参加できるように計画的に実施する。	・にじいろ広場とは？という所から発信する為にも、支援児以外の保護者の参加が出来たら理想だと感じました。 ・参観に参加しましたが、どの先生も興味深そうにメモされているのが印象的でした。 ・ＨＰはプル式情報提供の為、特に民間保育所等自分から情報を取りに行く余裕が無い場合は効果が薄いと思います。大変だとは思いますが、Ｆｅｃｅｂｏｏｋ等プッシュ式の情報発信も考えられてはどうか？アナログですが文書配布（押しつけ）も有りかと。
--	--	--------------------------	--	--	---	--	---	---

学校関係者評価総括 ・うさぎや鳥を飼育出来ない園で、昆虫や鳥に園児に触れてもらおうと、ピオトープ作り等、積極的に取り組まれている事を知りました。春は虫、冬は取り等季節で区切って重点的に取り組まれた方が、先生方もやり易いのではと感じました。 ・コロナ禍で、身動きがとりづらい中、今年度はこども園として確実に一歩進んだ園生活を送れた様に思います。来年もたくさんの事に取り組めたらと思います。

次年度に向けた重点的な改善点 ・比較的街中で生物にふれ合うのは厳しいのかもしれませんが。生物にこだわらず、雨や雪等の気候や、植物で四季や生物を感じていけるような保育を行い、先生方に負荷がかからない範囲で取り組める様行っていって欲しいです。生物が苦手な保護者もいるので、それからしたら昆虫ケースのミミズだって園にしか出来ない触れ合いになります。（ピオトープは難しいらしいですよ。専門家を呼ばないとかもですね。） ・コロナが5類になった際には、今まで出来なかった事をどんどん進めて欲しいです。
--

自己評価の基準 A：目標を上回った B：目標どおりに達成できた C：目標をやや下回った D：目標を大きく下回った